黙示録の記録

第18章

バビロン鎮魂曲

著／ヘンリー モリス

訳／宇佐神 正海

第18章　バビロン鎮魂曲

新バビロンのように流星が飛来するかのように出現したおおいなる世界都市はなく、またこのような一つの大地震で完全に倒壊した都市もありません。前の章で検討したように、ユーフラテス河畔のバビロンは、何世紀にもわたって、その活動はなく前触れだけでした。

そこには今なお悪霊たちを思い出させるものがありました。悪霊たちはかつてそこで偶像崇拝による汎神論を普及させるべく徘徊していました。イザヤが予言していたように**「そこには荒野の獣が伏し、そこの家々にはミミズクが満ち、そこにはだちょうが住み、野やぎがそこにとびはねる。山犬は、そこのとりでで、ジャッカルは、豪華な宮殿で、ほえかわす。その時の来るのは近く、その日はもう延ばされない。」**（イザヤ書13章21、22節）。

しかし、大いなるバビロンは本当に死んではいません。**「昔はいたが今はおらず、やがて来る」**（黙示録17

章8節）実体は、獣としてヨハネに現れました。それは突然墓から現れ、もう一度「大都市」となります。圧倒的な必要性という効果に基づいて、この大都市は、西側10か国で連盟を組んだ帝国によって、前例のない建設計画で権限を与えられ、獣によって勢力的に完成すべく押し進められます。最後に、地上のすべての国々の王となっている獣の、大いなる世界首都としての落成式を執り行います。

バビロンからの出口

大いなるバビロンの倒壊は、その建て上げよりはるかに突然でさえあるのです。世界中の残りの都市すべてと同様に、新しいバビロンの市民はまもなく怒りの鉢の災害、すなわちひどい悪性の腫物、血のような水、激しい炎熱と叩き付ける雹を経験し始めます（黙示録16章）。ヨハネは地上に起こるこれらの恐ろしい光景を以前に目撃していました。バビロン人の長年にわたる陰謀の意味を学ぶために時間をさかのぼって、災害をもたらす天使たちの一人がヨハネをちょうど良い時に地上に連れ戻していたからです。ヨハネは、おおよそ患難期の真ん中で、ちょうど最後の七つの鉢の災害が始まる直前に、バビロンの宗教的構成部分が崩れ落ちる瞬間を観察しました。

けれども、ヨハネは天使が彼を連れ出した状況に連れ戻されました。第七の災害は完了しました。そのクライマックスは巨大な地震で地上の他の都市すべてを滅ぼし、山々と地上の島すべてを平地にします。こう

して今、バビロンに目が向けられるのです。

黙示録18章1節　この後、私は、もうひとりの御使いが、大きな権威を帯びて、天から下って来るのを見た。地はその栄光のために明るくなった。新改訳

新しい天使とは、第七の最後の災害をもたらした天使の一人ではなく、どうやら地上の裁きに直接参与していない、明らかにバビロンに下される最後の裁きのためにとっておかれた天使です。恐らく、ヨハネが前にバビロンにやってくる崩壊についての予報を聞かされた同じ天使です（黙示録14章8節）。とにかく、彼は最高位の天使の一人で、力強い全地（地球と同じ言葉）を照らすほどのエネルギーを持つ天使です。

バビロンは第五の鉢の裁きのもと絶え間のない闇に覆われていたことが思い出されます（黙示録16章10節）。今や、突然、バビロンの地は大いなる輝きで照らされました。住民による束の間の息抜きはその輝きの源・天から降りて来つつある力ある天使を見て、すぐさま恐怖に変わったのです。

どういうわけか、エルサレムを除いて、バビロンは地上の大都市で残された唯一の都市で、大いなる地震で瓦礫にならなかったのです。水の涸れたチグリス川とユーフラテス川にはさまれたバビロン平原にあるという得難い地の利がこのことに貢献したのかもしれません。しかし、真の原因は、全地球の振動の方向と強さは第七の天使によって管理されていたからです。

けれども、バビロンは尚大きな裁きのために取っておかれただけです。バビロンは山々のように永遠に消え去らなくてはならないのです。そして、バビロンはまず燃え上がり、ついで、しばらくの間人の住めない

ところになり、最後に永遠に全く見出せなくなるに違いありません。

黙示録18章2節　彼は力強い声で叫んで言った。「倒れた。大バビロンが倒れた。そして、悪霊の住まい、あらゆる汚れた霊どものくつ、あらゆる汚れた、憎むべき鳥どものくつとなった。新改訳

天使は大声で力強く叫んで、ものすごい光エネルギーだけでなく、音声エネルギーも発しています。すべての人が天使を見、天使の声を聴く時、彼らが聞くことばは聞く人をしてひどく怯えさせる内容です。

大バビロン倒壊のアナウンスがなされ、繰り返される、まさに患難期の折り返し点でなされたように（黙示録14章8節）。折り返し点では、未来に対する警告と約束であり、また、おそらく宗教的バビロンの倒壊に関する言及でした。いまや、政治的バビロン即ち、大バビロンの最終的倒壊に関するアナウンスです。

バビロン倒壊の結果は、住人の完全な全滅であり、それに続きこの章の初めに言及したように（イザヤ書13章21、22節）イザヤが予言した荒廃・徹底的荒廃が続きます。イザヤが述べていたサチュロス（半人半獣の酒色を好む森の神）は、レビ記17章7節と第二歴代誌11章15節の「みだらな神」と同じヘブル語に由来しています。「ドラゴン」は恐竜かもしれないが、痛ましい生き物に対するように、悪霊に対する言及かもしれません。ともかく、最近の歴史時代でバビロンが経験した廃墟は、患難期の終わり近くに短期間繰り返されるはずです。最初は後で起こることのひな形であり、第二の類形です。

大バビロンが再建されるにつれて生じた勝利に酔った不敬な言動を想像できます。バビロンの長く放置された廃墟は、ネブカデネザルが建設したよりはるかに素晴らしい大都市にとって代わりました。そして、バ

ビロンへの創造主の裁きは、実際はともかく、見たところ、獣のより偉大な権勢によって破棄されてしまっていたのです。したがって、彼らは底意地の悪い歓喜をもって誇ることでしょう。

しかし、彼らの勝利は、実に短命です。恐らく、ほんの2、3日中に、荒廃はさらに大きくなり、永遠に続きます。悪魔の集団と悪霊どもを除いて、そこには何も残されないでしょう。これらは、確かに、邪悪なバビロンの人々に大いなる影響力を行使してきたが、今や、彼らは肉体から分離した霊に過ぎません。彼らが占有していた身体は残り火として燃えていて、彼らの魂は黄泉に去りました。

廃墟を不潔にする汚れた鳥の群れもあり、そこに住んでいた人々の黒焦げになった身体を多いに飲み食いしています。これらの群れは、涸れ上がったユーフラテスを横切った東方の軍隊についてきた大勢の群れなのでしょう（黙示録16章12節）。創造主は、彼らにハルマゲドンでの大宴会に集まるようにと命じていたのです（黙示録19章17、18節）。ちょうど7年前イスラエルに侵入したゴグの軍隊の死体を食べたように（エゼキエル39章17～20節）、しかし、これらの穢れた憎むべき鳥は、一時、バビロンの廃墟に留まるために西方に向うのを喜んで後回しにします。

黙示録18章3節　それは、すべての国々の民が、彼女の不品行に対する激しい御怒りのぶどう酒を飲み、地上の王たちは、彼女と不品行を行ない、地上の商人たちは、彼女の極度の好色によって富を得たからである。

「地の王たちは、この女と不品行を行い、地に住む人々も、この女の不品行のぶどう酒に酔ったのです」（黙示録17章2節）とあるような同じ起訴状がここにあります。それは「その不品行のぶどう酒を、すべての国々

の民に飲ませたもの」と黙示録14章8節にあるのと同じです。黙示録14、17、18章のバビロンは皆明らかに同じバビロンに違いありません。

それにもかかわらず、私たちが知っているように、違いもあるのです。宗教的バビロン・大淫婦、そして政治的バビロン・緋色の獣に相当するものがあるに違いないのです。彼らは一つの貨幣の裏と表のようであり、その一団の一部となっており、各々は他の部分を支えているのです。

各々は大都市バビロンで、久しく死んでいて、今死から生き返ったが、決して本当に死んでいたのではなかったのです。「獣の角」の炎のような怒りで女が焼かれて、最後に彼女の死に際して、彼女を憎む10人の王たちが彼女に火を付けますが、彼女はなお昔の大淫婦に備わっていた姦通でよくばりの霊を吹き込まれた大都市として生きています。

大淫婦の黄金の装具すべてを以って身を飾った偽りの教会は燃やされるが、商業と政治の売春は今まで以上に切れ目なく続きます。創造主を敬わない世界の宗教礼典は、もはや神秘的な儀式やサタンの教義に焦点をあてるのではなく、大いなる神マモンとバビロンの生き方を率直に選び取ります。

国際銀行家たち、社団法人の管理者たち、商業の大立て者、海運業の有力者、彼らの大勢のマネーロンダリングのすべて、そして権力を求める下役たちは、かつては彼らの勢力範囲をニューヨークとジュネーブ、ロンドンとパリ、モスクワとベルリン、ヨハネスブルクと東京を行ったり来たりしていましたが、今はその勢力範囲すべてを大いなるバビロンに集めることが素晴らしく役立つのを見出しています。バビロンは世界の大いなる首都で、世界中のあらゆる資本がバビロンを中心に動いていくのです。

患難期の激しいすべての災害の最中にあってさえ、バビロンは世界の商人のためいつもの通り商取引があ

ります。あらゆる面での不足とインフレは留まるところを知りませんが、金を操る王たちは、そのすべてを彼らの利益にする方法を知っていて、彼らの富はいやがうえにもまし加わります。けれども、それも長くは続きません。

聞きなさい。金持ちたち。あなたがたの上に迫って来る悲惨を思って泣き叫びなさい。あなたがたの富は腐っており、あなたがたの着物は虫に食われており、あなたがたの金銀にはさびが来て、そのさびが、あなたがたを責める証言となり、あなたがたの肉を火のように食い尽くします。あなたがたは、終わりの日に財宝をたくわえました。（ヤコブ5章1～3節）。

政治的宗教的資本とともにバビロンに戻ってくる世界中のこの商業資本の動向は、預言者ゼカリヤによってエパ枡の幻ではるか昔に予知されていました（ゼカリヤ5章5～11節）。エパ枡は、もともと容積測定の単位（大雑把に約36リットル）で、古代社会で商取引の象徴としてしばしば用いられていました。ゼカリヤは、幻でエパ枡の中に女を見ました。そして彼女の口は鉛の重しで塞がれていました。

貪欲は偶像崇拝であり、両者の古代の中心はバビロンの大都市でした。けれども、ゼカリヤの預言は、ずっと昔、バビロンの栄光に満ちた最盛期のユダヤ人捕囚からユダヤ人が帰還した後に書かれました。ユダヤ人たちはバビロン人の偶像崇拝に対する熱心さを放棄していましたが、その代わりに、バビロン人の商業主義と貪欲さが強力に注入される結果となりました。天使が「邪悪さ」（原文では定冠詞がある）と呼ぶ、エパ枡の女が象徴したのはこの罪でした。バビロンの滅亡は、世界の貿易と銀行業の中心を他の諸民族に移動する

結果となり、ユダヤ人自体この精神が吹き込まれてしまっていたのです。

しかしその時、ゼカリヤは幻で明らかになった驚くべきドラマを見たのです。

それから、私が目を上げて見ると、なんと、ふたりの女が出て来た。その翼は風をはらんでいた。彼女たちには、こうのとりの翼のような翼があり、彼女たちは、あのエパ枡を地と天との間に持ち上げた。そこで私は、私と話していた御使いに尋ねた。「あの者たちは、エパ枡をどこへ持って行くのですか。」彼は私に言った。「シヌアルの地で、あの女のために神殿を建てる。それが整うと、そこの台の上に安置するためだ。」（ゼカリヤ5章9～11節×口語訳）。

二つの翼をもった女たちは天使ではありませんでした。なぜなら、天使たちは聖書で常に男性として表示されていたからです。こうして、エパ枡のシナルの地への運搬は、創造主からの使命ではなく邪悪な者からの使命でした。二人の女はその翼で風（または霊）を起こすきよくない鳥・コウノトリのような大きな二つの翼をもっていました。女たちはまた底知れぬ邪悪な女の性格を持っていました。なぜなら、彼らは彼女らが出てきたシヌアルの地に戻すべく邪悪な霊によって彼女を移しています。彼女らは大淫婦・政治的、宗教的バビロンの二重の性格を比喩的に表しているのかもしれません。

しかしながら、エパ枡の中にいる女は、全体の象徴に加えて、明らかに貿易のテーマと欲深い霊と描写されています。この場面に似たある物、すなわち、基準となる重りと物差しを運んでいる翼をもった女は、国際的商取引の象徴的紋章として世界中でしばしば用いられています。女が欲深さを象徴するためにしばしば

用いられている理由は、女がバビロンを象徴するのに用いられた理由と同じで、疑いもなく、その起源を描写する必要があるからです。黙示録にある女が**「大淫婦と憎むべきものの母」**であるように、エパ枡の中の女は、富を偶像とする拝金主義を表しています。金銭を愛することが**「あらゆる悪の根だからです」**（Ⅰテモテ6章10節）。

こうして、ゼカリヤの幻は明らかに世界の財政と商取引の中心がニューヨークやジュネーブその他の大都市にある根拠地から動かされ、速やかに世界を横切ってシヌアルの地にある新しい財団とその本部に移す時を予告しています。もちろん、バビロンの聖書的用語に過ぎないシヌアルの地は、バベルの塔が最初に建てられて以来、常にそこにあったのです（創世記11章2節また、イザヤ11章11節、ダニエル1章2節）。

金銭と商取引には本質的に何も悪いことはありませんが、それはしばしば過度の執着の対象になりやすいのです。それどころか、盗みと人殺しとあらゆる種類の邪悪さに繋がります。欲深さと偶像崇拝を聖書が同一視しているのを理解するのは難しいことではありません。宗教的バビロンが地の王たちによって滅ぼされた後でさえ、商業都市バビロンとして存在し続け、後のバビロンの滅亡はこれらの同じ王たちによって嘆き悲しまれます。

地の王たちが不法にも歴史を通して大淫婦と彼ら自身が契約を結んできたので、地の偉大な商人たちや金融業者たちは王たちよりしばしばもっと力を持っていたのです。彼らは大淫婦の極度の好色、または、「おごり」文字通りには「心身の過労」（ギリシャ語 strenos）によって、裕福（または権力、ギリシャ語 dunamis）になっていたのです。富には大きな力があり、このような人々は富を豊かに持っているのです。

黙示録18章4節　それから、私は天からのもう一つの声がこう言うのを聞いた。「わが民よ。この女から離れなさい。その罪にあずからないため、また、その災害を受けないためです。

この声は天使からの声ではなく、**主**イエスご自身からの声で、「わたしの民」に対する緊急の命令です。この終わりの時期に、世界的迫害のまさにその発信源であり中心地であるバビロンに、信者がいて、彼らに解放されていたこと自体驚きです。時間背景は、売り買いする者のすべての額か右手に刻印を押し、獣を礼拝するという徹底的なプログラムが効果的に履行される前で、明らかに患難期の中間点を過ぎて間もなくのことです。

しかし、七つの怒りの鉢の恐ろしい災害が始まろうとしています。そして、これらの幾つかはバビロン自体に最も厳しく襲い、特に闇の災害、それに続く最後の完全な破壊とバビロン市の最終的な完全な絶滅、が続きます。**主**イエスは、御恵みの中に、なおバビロンにいてキリストを信じるかもしれない人に対し特別な警告を与えています。

実際に、三人の天使が世界中で見られ創造主に立ち返るように人々に警告するのを聞くのは、どうやらほぼこの同じ時です（黙示録14章6～12節）。三人の天使の一人は創造者である造り主の「永遠の福音」を宣べ伝え、第二の天使は来るべきバビロンの倒壊についての警告を、第三の天使は人に地獄の刑罰をもたらす獣の刻印を受けないように宣べています。バビロン在住の信者に対するこのような点での特別な警告は、痛烈で的確です。偽りの預言者に対する致命的な宣告（黙示録13章15～17節）が、特に厳しく課せられるのが首都においてです。もしバビロン在住の信者たちが何とかして獣の粛清を逃れることができたとしても、バビ

ロンに来る恐ろしい災害を彼らは受けることになるのです。したがって、信者たちにバビロンを即刻立ち去るようにとの**主**の差し迫った警告があるのです。

しかし、第一にバビロンに信者が実際に住んでいるのはなぜでしょうか。確かに、彼らはこのようなまさにクリスチャンに敵対する活動の中枢と言う環境では場違いであることを知るべきです。創造主は信者に世界の王座に就く前の反キリスト、荒らす憎むべきものを見分けるカギをずっと与えていたのです（黙示録13章18節）。

実は、「奥義」であるバビロンは、また信者にとって不思議な魅力を常に持っていたのです。歴史を通して、クリスチャンが目撃した最も悲しむべき体験の一つは、進化論の世界体系に基づく人間中心思想との妥協により、クリスチャンの証言が絶えることなく薄められてきたことです。

バビロン在住の彼らの同僚による承認と認可を求めて、クリスチャンの知識階級、クリスチャン芸人、クリスチャンの企業や商売人、さらにキリスト教の聖職者にいたるまでの、数々の聖書的ではない安易な妥協は、何年にもわたって、数えきれないクリスチャンの個人と会社の破滅をもたらしたのです。創造主は繰り返し、この妥協の問題を取り扱わなければならなかったのです。

不信者と、つり合わぬくびきをいっしょにつけてはいけません。正義と不法とに、どんなつながりがあるでしょう。光と暗やみとに、どんな交わりがあるでしょう。キリストとベリアルとに、何の調和があるでしょう。信者と不信者とに、何のかかわりがあるでしょう。……それゆえ、彼らの中から出て行き、彼らと分離せよ、と主は言われる。汚れたものに触れないようにせよ。（Ⅱコリ6章14～17節）

この世の同じ誘惑が多くの信者を、バビロン人の最後の背信の舞台にどうやら惹きつけるようです。俸給と名声の要求が、多くの有能なクリスチャン実業家と知的職業人（建築家、技師、商人、医師、会計士やその他）を、この刺激的な活気に満ちた新都心の計画とその活性化に参加するように誘惑します。多くの建設とその他の商売に従事しているクリスチャンの働き人たちは、高賃金におびき寄せられます。確かにこれら多くのクリスチャンたちは、機会を捉えてバビロンへ移動するのを合理化し、こうして、世界で最も重要な都市でそこにいる最も重要な人々に危険を承知で「目撃者」として歩み寄っていたのです。

このように多くのクリスチャンたちが見誤ってしまっても、有能な目撃者は決して妥協しないということです。このような環境での創造主のメッセージは、「わが民よ、それによって彼女をなだめ惹きつけるために」彼女のようになるのではなく、むしろ「わが民よ、この女から離れなさい、その罪に与らないために」なのです。エレミヤ書の中にある並行記事はこれらのことばで**主**からの警告を記録しています。すなわち、**「わたしの民よ。その中から出よ。主の燃える怒りを免れて、おのおの自分のいのちを救え。」**（エレミヤ51章4節）と。

黙示録18章5節　なぜなら、彼女の罪は積み重なって天にまで届き、創造主は彼女の不正を覚えておられるからです。

ニムロデは「天に届く巨大な神殿を建てる計画に最初のバベルの反逆者たちを導きましたが、天に届いたただ一つのものは、彼らの反逆の悪臭でした。創造主はこの計画を見、彼らの罪を罰するために降ってこな

くてはならなかったのです（創世記11章4、7節）。同じように、後のバビロンの偉大なる王は、**「その高さは天にまで届いた。」**（ダニエル4章20節）と、偉大な力強い木が自分自身を象徴することを示す夢を見ましたが、その木は切り倒され、驕り高ぶったネブカデネザルは、7年もの長い間獣と同じような生活をしなければなりませんでした（ダニエル4章30～33節）。古代バビロンの塔も後のバビロンの樹はどちらも実際に天に達しませんでした。なぜなら、その前に天からのおおいなる罰が下されたからです。**「バビロンへの罰は、天に達し、大空まで上ったからだ」**（エレミヤ51章9節）。

創造主は長く耐え忍ばれておられますが、バビロンの邪悪さが極みに達した際の裁きを忘れることはありません。バビロンの反逆は長く、深く、広く、怒りの杯を飲む時が来ているのです。

創造主の呪い（呪詛）

黙示録18章6節　あなたがたは、彼女が支払ったものをそのまま彼女に返し、彼女の行ないに応じて二倍にして戻しなさい。彼女が交ぜ合わせた杯の中には、彼女のために二倍の量を混ぜ合わせなさい。新改訳

彼女がしたとおりに彼女に返し、そのしわざに応じて二倍に報復をし、彼女が混ぜて入れた杯の中に、その倍の量を、入れてやれ。口語訳

主の民にバビロンから逃れるようにと熱心に勧める天からの声に答えて、バビロンに災いが降りかかるようにと**主**に熱心に願う請願者の応答の祈りがきます。この祈りの言葉が、バビロン在住の信者からきているのか（彼らがバビロンに住む決定を下した時、彼らが予測していたはずの—あるいは予測していなかった—迫害を現に経験している）、又は、直接ヨハネからのものかは述べられていません。

ともかく、本質的に二倍の報復をバビロンに返済すべく**主**に熱心に促しています。**「彼女がした通りに彼女に返す」**バビロンの倒壊に対する二重唱は（2節）、バビロンの二重の返済と苦渋の杯を二倍に満たすことへの答えです。さらに、それはバビロンの二重の性格を二重に思い出させるものです。大淫婦のバビロンは火を以って焼かれ、商業都市バビロンは火災でまさに完全に破壊され、それから、海に消え去ろうとしています（黙示録17章16節、18章8、21節）。

これは邪悪な杯に関して黙示録が言及している第六番目です。その杯で、バビロンと世界中のすべての国民が酔わされたのです（黙示録14章18節、17章2、4、6節、18章3、6節）。またそれは創造主の怒りの杯に関しての第三の言及（黙示録14章10節、16章19節、18章6節）で、創造主があるものを他のものに変えるとは驚くべきことです。

バビロンは主の御手にある金の杯。すべての国々はこれに酔い、国々はそのぶどう酒を飲んで、酔いしれた。（エレミヤ51章7節）。**「わたしは、その首長たちや、知恵ある者、総督や長官、勇士たちを酔わせる。彼らは永遠の眠りについて、目ざめることはない。」——その名を万軍の主という王の御告げ——**（エレミヤ51章57節）。

黙示録18章7節　彼女が自分を誇り、好色にふけったと同じだけの苦しみと悲しみとを、彼女に与えなさい。彼女は心の中で「私は女王の座に着いている者であり、やもめではないから、悲しみを知らない。」と言うからです。　新改訳

彼女が自ら高ぶり、ぜいたくをほしいままにしたので、それに対して、同じほどの苦しみと悲しみとを味わわせてやれ。彼女は心の中で「わたしは女王の位についている者であって、やもめではないのだから、悲しみを知らない」と言っている。口語訳

呪詛の祈りは、バビロンが過去に得々として練り歩いた自己の誇りと栄光や贅沢な生活様式と同じ濃密さで苦痛と悲しみが訪れるようにとの請願で締めくくっています。**「贅沢をほしいままにし」**と言う言葉は、3節の**「極度のぜいたく」**と本質的に同じ言葉です。共に生活での「見栄を張る」とか「気に障る」贅沢な歩みに対する言及で、明らかに、バビロンに集中していた世界銀行と商業組織の利益優先の共同市場が支持していたものです。

誇りと贅沢とは著しく異なって、創造主に霊感された祈りは、痛みと悲しみをもたらします。「苦しみ」と言う言葉は一つは肉体の痛みを当然伴い、拷問、激しい苦痛とさえ訳されうるのです。同じように、「悲しみ」と言う言葉は、たいてい「死に対する悲しみ」とも訳されます。このように誇りと贅沢は突然痛みと喪に変えられるはずです。

再建されたバビロンの美しい新しい建造物や並木道（大通り）、おそらく回復されたネブカデネザルの空中庭園もあり、そして、ユーフラテス川から水を引いて見事にきれいに刈り込まれた公園、装飾を凝らした首

都が実にシヌアルの広い平原にある誇り高い女王のように鎮座しています。バビロンに集められた文明と宗教体系と共に世界の軍隊と経済力すべてを持って、バビロンは壮大な年月をかけて建て上げられて出現したかのようです。比喩的表現がイザヤ書47章にあります。

おとめバビロンの娘よ。下って、ちりの上にすわれ。カルデヤ人の娘よ。王座のない地にすわれ。もうあなたは、優しい上品な女と呼ばれないからだ。…… あなたは「いつまでも、私は女王でいよう」と考えて、……だから今、これを聞け。楽しみにふけり、安心して住んでいる女。心の中で、「私だけは特別だ。私はやもめにはならないし、子を失うことも知らなくて済もう」と言う者よ。 子を失うことと、やもめになること、この二つが一日のうちに、またたくまにあなたに来る。あなたがどんなに多く呪術を行っても、どんなに強く呪文を唱えても、これらは突然、あなたを見舞う。（イザヤ47章1、5、7～9節）**新改訳**

前に述べたように、バビロンに対するイザヤエレミヤの予言は、ネブカデネザルのバビロンで前兆的に部分的成就と、反キリストにより回復されたバビロンにおける最終的完璧な成就の両面を持っているのです。

その原理は、もちろん、都市としてのバビロンだけでなく、同様に組織としてバビロンの精神に深く染まっているどのような都市にも当てはまります。**「高ぶりは破滅に先立ち、心の高慢は倒れに先立つ。」**（箴言16章18節）。**「ですから、立っていると思う者は、倒れないように気をつけなさい。」**（Ⅰコリント10章12節）

黙示録18章8節　それゆえ一日のうちに、さまざまの災害、すなわち死病、悲しみ、飢えが彼女を襲い、

彼女は火で焼き尽くされます。彼女をさばく創造主である主 は力の強い方だからです。

ここに6節と7節の呪詛に対する創造主の応答があります。聖書の呪いの詩篇（詩篇35篇）のように、この祈りは創造主による霊感を受けており、創造主ご自身の裁きと願いを反映しています。したがって、祈りは確かに応えられます。したがって、応答は、創造主の**「それゆえ」**のことばで始まります。

誇り高きバビロンは、「とこしえに女王となる」、「悲しみを見ない」、と「贅沢をほしいままに生きた」と自慢していました。しかし、それから、怒りの鉢の災害が来、そして、まさにその最初の日呪いが突如襲います。（すなわち、最初にひどい悪性のはれもの、続いて黙示録16章に記されたような他のすべての災いが続く）バビロンに住む邪悪な居住者は死と悲しみと飢えを経験し始めます。

「バビロンは完全に火で焼かれるでしょう」 第七の最後の災害までその通りに経過し、バビロンは世界の残りすべての都市のようにそれらの災害で苦しみます。事実、そのうちの二つの災害、闇の災害とユーフラテスに来る災害（黙示録16章10、12節）は、特にバビロンに悪い影響を及ぼします。最後の災害は、地球全体に及ぶ地震で、エルサレムとバビロン以外の世界中のすべての都市をなぎ倒しました。メソポタミヤの平原に位置した、バビロンの頑強で高価な新しい建築物は、恐ろしい振動にもなんとか耐えることが出来ました。ただし**「大バビロンは創造主の前に覚えられて」**（黙示録16章19節）いたのです。

ギリシャ語で hatakaio ハタカイオは、火で焼きつくすという言葉です。聖書はこのように荒廃させる火の源を記していませんが、確かに通常の火ではありえないのです。バビロンの建物は、確かに耐火性の建造物なのに、それらの建造物は完全に焼かれて灰になるのです。

地震は地球のマントルから火と硫黄を噴きださせたのかもしれないし、バビロンに蓄えられた核弾頭を持つミサイルが何らかの方法で爆発したのかもしれません。厳密にいうと、それはすべて天からの超自然的火かも知れません。

地の王たちが、奥義であるバビロン、大淫婦の宗教体系を火で燃やしていたが、これら同じ王たちが商業都市バビロンの燃焼を悲しんでおり（黙示録17章16節、18章9節）、したがって、これらは明らかに同じ建物ではありません。前者は後者の前兆を示しているが、最後に完全に火で焼きつくされます。

その火が、少なくとも超自然的に引き金を引かれて放たれた超自然的火である可能性は、この節の最後の句「**彼女をさばく創造主である主は力の強い方だからです。**」で強調されています。

黙示録18章9節　彼女と不品行を行ない、好色にふけった地上の王たちは、彼女が火で焼かれる煙を見ると、彼女のことで泣き、悲しみます。

バビロンを焼き尽くす大虐殺は、瞬く間に世界中に知らされます。地震で荒廃した諸都市の瓦礫の中で、超自然的能力を持つ首都にいる偉大な世界の指導者が、何らかの方法で地球の秩序と繁栄を回復できるとなお信じていました。それにしても、バビロン焼失のニュースですべての希望は粉々に打ち砕かれます。

全地球に及ぶ地震とそれに続くバビロンの滅亡の間には、しばらくの時がある、すなわち、外観上、ほぼ常態に復すのに十分な時間があると思われます。伝達は重要になり、従って、彼らを元に戻すことにあらゆる努力が集中的に向けられるでしょう。まもなく、ラジオとテレヴィジョンはニュースと指示を伝え始めます。

ハルマゲドンの途上にあった軍隊は、一時的に地震のため隊列が乱されますが、まもなく彼らは進軍を開始します。

その時、突然、恐ろしい火が大バビロンを襲います。恐ろしい瞬間が、明らかに、世界中のすべての人々、特に、諸国の王たちや指導者たちがテレヴィジョンを見ている時に起こります。恐らく、重要な発表と指示が世界的危機に関して与えられ続けているので、全ての人が見守るように指示されていたのです。けれども、偽りの予言者とともに獣自身は、すでにエルサレムの近くに集結している軍隊の管理のためにバビロンを去っていることでしょう。

地上の王たちや偉大な人々が、放映されているテレビをぞっとして見つめている時、テレビ画面に突然起こった途方もない炎、巨大な火の玉がバビロン市全体を飲み込むのを見ます。これら地の王たちは皆僅か2、3年前に彼らの王国を獣に委ねたのです（黙示録17章17節）。彼らは、ほんのしばらくの間、バビロンの制度が世界にもたらした贅沢と大きな繁栄を楽しんでいました。彼らの王国が大きな災害の影響を受けるにつれて、彼らはますます不安に陥りましたが、なお獣であり彼らの主人である年を経た竜を信頼し続けたのです

しかしながら、今や、バビロンが燃えて、その煙が巨大なきのこ雲となり空高く舞い上がるのを見て、彼らは全く慌てふためき見続けなければなりません。

世界に降りかかっている災害があまりにもひどい、即ち、政治の首都を滅ぼすだけでなくその経済と産業センターをも滅ぼすことを明確に理解し始める時、大いなる悲惨に伴う悲しみが世界中で聞かれるようになります。「嘆く」と「悲しむ」という用語は絵画的であり、前者はコントロールの効かないむせび泣きの状態を、後者は苦悩で胸を叩く状態を述べています。世界の力ある王たちにとって何という動きでしょう。

黙示録18章10節　彼らは、彼女の苦しみを恐れたために、遠く離れて立っていて、こう言います。「わざわいが来た。わざわいが来た。大きな都よ。力強い都、バビロンよ。あなたのさばきは、一瞬のうちに来た。」

嘆き悲しみ、身震いしているこれら地の偉大な王たちは、目にしていることで明らかにおびえていました。彼等は獣と竜に、彼等の希望すべてを今もいついつまでも託しているのを知っており、また獣の印を受けたすべての人の上に創造主の有罪の決定が下されるのを良く理解していて、彼等はバビロンの苦悩は間もなく彼等の苦悩になるかも知れないと気付いておびえているのです。

これらの王たちの幾人かは、ハルマゲドンへ向かう彼等の陸上を行く軍隊と一緒にいるかも知れません。従って、遠くから望遠鏡で巨大な煙の柱を実際に見るかも知れません（ヨエル2章30節を参照）。しかしながら、王たちの最も多くは、実際に遥か彼方で立ち上がって、衛星放送を介してその光景を見ます。彼等はそれを見、心に苦悩と恐れがもたらされます。

英語のalas・**「わざわいが来た」**はギリシャ語のouai（オウアイ）の意味をただ部分的に伝えており、そのことばの真の感じは、悲しみと恐れを示します。それは、黙示録8章13節のようにどこででも「わざわいがくる」と訳されているのと同じことばです。世界中で最も新しい最も豪華で最も重要な都市に齎された突然の運命にびっくりして、しかもそれがかつてなかったような大地震で他の諸都市が崩壊したあとにきたのです。彼らただむせび泣き後ずさりすることしかできません。そして、ヨシャパテの谷で彼らを待ち受けていることを知っている恐ろしい対決を心配しているのです。

裁きが近づいており、彼等は裁きに直面しなければなりません。創造主は長い間じっと我慢しておられたが、悔い改めの時代は過ぎて、創造主の裁きの時は速やかに近づいています。バビロンの裁きの時はすでに来ています。獣は、偽予言者たちと共にハルマゲドンに向かっています。そして、竜自身は、彼に付く悪霊の大群と共にそこにいます。これらの哀れな王たちに残された唯一の希望は、徒労に過ぎないけれど、彼等自身の軍隊をまたそこに集め、彼等の指導者である悪魔の三位一体がなんらかの方法で彼らを救出できると信頼するだけです。

黙示録18章11節　また、地上の商人たちは彼女のことで泣き悲しみます。もはや彼らの商品を買う者がだれもいないからです。

地の王たちがバビロンの倒壊を嘆き悲しむだけでなく、地の商人たちもバビロンのために泣き悲しんでいます。9節の「Bewail（深く悲しむ）」は、7節のsorrow（悲しみ）または8節のmourning（悲しみ）の動詞形です。地の商人たちの反応は、地の王たちの反応と同じです。

実は、これらの商人たちはある意味で「王たち」でもあります。彼等は通常の小売商ではなくて、銀行業、海運業、建設業と報道機関、企業の会長、貿易の巨人たちです。これら商人たちは**「地上の力ある者ども」**（23節）です。以前に、患難期の初期の裁きを通して、これら**「地の王たちと力ある人々」**は**「御座にある方の御顔」**から隠れることを求めていました（黙示録6章15、16節）。今彼等は隠れるところがないのを知り、間もなく御座に座っています方と出会わなくてはなりません。

「商人たち」（ギリシャ語emporos）ということばは、ここ黙示録１８章（４回）でだけ用いられ、特に卸売り商人（業者）に対する言及で、彼等は特に、国際間での貿易を大量に取り扱っています。これら二つの世界の先導者たち（地の王たちと商人たち）をこのように密接に並べて列挙するのは実に適切です。

このように国際的に有力な者たちと資本家たちは、通例、王座の陰での支配力となります。王たちや大統領たちは、しばしば彼等の企てに融資する人々によって権威を得、保っています。今度は、これら地の偉大な人々は、彼等が政治力を駆使して築き上げた人々による土地の払い下げと貿易の専売権と税の抜け道と数え切れない恩恵を受け、すべて相まって、さらに彼らをそれ以上豊かにします。

このバビロン流の貪欲な体系（貪欲は偶像崇拝であり、創造主の代わりに富の神マモン礼拝）は、全ての時代を通して（２３、２４節を参照）言い難い悪の源になってきました。使徒パウロは**「金銭を愛することが。あらゆる悪の根だからです」**（Ⅰテモテ６章１０節）と言いました。未信者だけでなく数え切れないほどのクリスチャンがそれによって騙されてきているのです。そのような人についてパウロは**「衣食があれば、それで満足すべきです。金持ちになりたがる人たちは、誘惑とわなと、また人を滅びと破滅に投げ入れる、愚かで、有害な多くの欲とに陥ります。」**（Ⅰテモテ６章８、９節）と述べています。

これら偉大な地上の商人たちは彼等の罪のために嘆かないし、またバビロン市にいる彼等の同僚の無残な死に対しても嘆きません。彼等の叫びと悲しみは彼等自身の経済的損失だけのためです。もはや彼等の商品を購入する者はいないのです。彼等の利益の泉は枯れています。彼等の偉大な工業帝国は彼等の眼前で崩壊しており、人生における彼等の唯一の興味は取り去れらており、したがって、彼等は悲しみ嘆き、泣くのみです。

黙示録１８章１２節　商品とは、金、銀、宝石、真珠、麻布、紫布、絹、緋布、香木、さまざまの象牙細工、高価な木や銅や鉄や大理石で造ったあらゆる種類の器具、

ここに地上の大いなる人々を富ませた売買商品の項目の目立った目録があります。全部で２８の目録が挙げられており、この節には１４が、次の節に１４の目録があります。たとえヨハネが実際に今の時代の最後の世紀を見ていたとしても、言葉遣いは１世紀に特有なものです。事実、挙げられている品目は、どの時代にも非常に高価で値段の高い品物です。

２８の日用品が項目別（即ち、七つずつ四項目）に分けられている事実は、明らかにそのもの自体を指すと言うよりも、そのリストは代表であることを示唆しています。完全数としての七、土地の総ての方向全体への広がり（東西南北）の数としての四、こうして地上にある宝物の項目総てを象徴し結び合わせています。有史以来人々が求めてきた終わりのない多面にわたるすべての物的所有物は、――これらのために彼等は働いてきたし、陰謀を企ててきたし、盗みさえし、人殺しさえしてきた――巨大な火の玉と煙の柱で突然消え去るバビロンの商品が、ここに組織的に象徴的に記されています。

最初に、永久に価値ある品目、すなわち、重要性の真の物差し、貨幣制度の土台として常に役立っている貴金属や宝石がまず挙げられています。特に、患難期のようなインフレの時に、人々はまず彼らの貯蓄を守ろうとして本質的に価値ある品目（金、銀、宝石の原石、や真珠）と日常用いられている商品に投資します。

そして、国際間貿易商人の計画で、常に最高の立場であり続けようとするのです。

次に、世界の服飾のために価値ある布四種が記載されています。二つの最も貴重な価値ある素材、見事な亜麻布と絹、そして、二つの最も尊重される色彩、紫色と緋色が、世界中で途方もない衣類貿易の代表として明らかに記されています。

家庭用工業用のあらゆる種類の物質に対する需要が常に大いにあります。それらを売り買いできない商人にとって強い関心のある最も価値ある物質が、ここに六個挙げられています。なぜなら、物質でない精巧な調度品や装飾品にとって象牙や上質な木材以上に素晴らしい材料はありません。香木は、非常に固く、芳香を放つ針葉樹で、特に、古代ローマ人によってこのような用途で重んじられた。他の価値ある木材すべてが最も高価な建築材、大理石と共に言及されています。「あらゆる種類の器具」は、あらゆる種類の家具、住宅、装飾品と他の用途を含む十分に幅の広い用語です。

実用上最も重要な二つの鉱物も含まれています。「銅と鉄のあらゆる種類の器具」は、金属の構造物と家具だけでなく、音楽の管弦楽器、家庭用電気器具、機械装置、道具、武器とはてなしない金属用具一式を十分にカバーすると考えられる用語です。

ここに挙げられている品目の総ては、古代、近代の両方の人々によって高く評価されています。このような日常品の貿易は、有史時代と将来総ての時代を通じて、あくなきひとの欲望の中心であり、大商人の富の土台なのです。

黙示録18章13節　また、肉桂、香料、香、香油、乳香、ぶどう酒、オリーブ油、麦粉、麦、牛、羊、それに馬、車、奴隷、また人のいのちです。

次に、代表的贅沢品が挙げられており、香辛料、香水、油、と香のようなもので、すべては、輸出—輸入貿易で高価で高く評価された品目です。

黙示録を読む現代の読者にとって少なくとも特に興味深いのは、価値ある日常品の目録に葡萄酒とオリーブ油が含まれていることです。これらは特に封印の裁きの間中、特に重要なものとして記されています（黙示録6章6節）。前に述べた品目と同じように、葡萄酒は他のさらに幅広い品目の代表と思われ、人を酔わせる飲み物です。あらゆる時代のあらゆる民族は、良く知られたノアの最初の罪（創世記9章20、21節）以来酔いで堕落させられてきたのです。

患難期の邪悪で恐ろしい日々には、創造主を敬わない人々が歴史上かつてないほどにアルコール飲料と麻薬に頼るようになるのは確かと思われます。また、麻薬が**主**たる品目であることは、23節にある魔術への言及から明らかです。前に述べたように（黙示録9章21節）、この用語は、ギリシャ語の翻訳で、それから調剤学を英語でpharamaceuticsと字訳しています。これらのやがて来る日々にアルコール性飲料と麻薬の需要が大いに増すことは、これらから非常に大きい利益を得ている創造主を敬わない欲張りな商人たちによって、時空を超えてシミュレートされるのは確かです。

そして、オリーブ油も一覧表に載せられています。十二使徒の生きた一世紀頃、油に関する言及は、オリーブ油または、油そそぎと医療に用いた幾つかの同じような自然の油であったと理解されるべきです。けれども、

香「英訳はointmentsで軟膏」はすでに挙げられているので、或る他のタイプの油がここで意図されている可能性があると思われます。石油は古代世界では本質的に知られていなかったけれども（瀝青は知られていたが、現在オイルと呼ばれている物質は知られていなかった）、患難期に関連して、それは終わりの時代に世界経済を支配するようになるある種の油に対する預言的言及である可能性があります。

石油は、今日世界の輸送機関と産業体系の総てにとって欠かせない必需品になっています。そして、石油産出国は、他の国に戦略的に、石油の需要を自分に有利になるように用いて、大きい影響を及ぼすことが出来るようになっています。それゆえ、大きな石油カルテル（企業連合）は、これら嘆いている商人たちの中に含まれるのは確かです。バビロン自体、戦略的に、地球の最も重要な石油の埋蔵地の産生と輸出を統制する所に位置していたが、今や、その統制が効かなくなってしまっているのです。

恐らく、国際貿易の点から今日の石油よりもっと重要な唯一の生活必需品は、小麦の重要性で、それ故「麦粉と麦」が次に挙げられているのは驚くに当たりません。上質の小麦粉（ギリシャ語semidalis）は、新約聖書ではここの一回だけ述べられていて、最も上質の小麦粉に対する言及と考えられています。「小麦」の用語はギリシャ語sitosシトスで、「小麦」と共に「穀物」と訳されます。この文脈では、世界貿易で重要なあらゆる種類の農業生産物を代表するものとして理解するのが最善です。

農業生産物だけでなく、家畜の貿易も貿易上非常に大切ですが、これがバビロンの倒壊で急に止まってしまいます。あらゆる種類の家畜を包含した一覧表（ギリシャ語のクテノス）に述べられている「獣」は、荷物運搬の家畜であろうとまたは食肉用家畜（屠殺用家畜）であろうと、どのような種類の家畜に対しても用いられます。「羊」は「馬」のように分けて載せられています。羊はその肉と同様羊毛は生命維持に重要です。馬は

最も高い評価を得ている動物で、伝統的に、荷物運搬用動物として、そして工業で標準的力の物差しとして「馬力」という呼び名が与えられていますが、現代では、リクリエーションと軍事用で、乗馬用動物としてますます役に立っています。

一覧表に[(chariots)二輪の戦車]が含まれていることは、また興味をそそります。この用語は、古代世界に至るまでのある種の乗り物を暗に示しています。ギリシャ語(rheda)は、二輪の戦車ではなく、四輪の旅行用のワゴンを意味し、今日の輸送用の四輪車を含むと解釈されるはずというのが実に適切です。こうして、この用語は、特に、終わりの時代の大いなる自動車工業に言及していることでしょう。

最後に、商取引の品目の一つとして「奴隷、また人のいのち」に対する悲しい究極的言及があり、それはバビロン倒壊によって地の「商人たち」の管理から否応なしにもぎ取られてしまったのです。古代の奴隷売買は、ローマ人にとって欠くことのできないもので、１９世紀に入るまでキリスト教国に置いてさえ存在し続けたのです。さらに、奴隷制度は、いまだに完全には廃止されていません（特に、アフリカやアジアの国々で）、そして患難期を通して他の国々で生き返る事もあり得るのです。

しかしながら、この言及は、たぶん、いわゆる「白人奴隷売買」に関する言及です。奴隷と翻訳されたギリシャ語はソーマで、からだを意味し、通常そのように訳されています。

強制された売春での国際間の売買は男女ともに悲劇ですが、現代これらは財政的に有利な商売で、疑いもなく将来の悪しき時代にさらに規模が大きくなります。これら悪徳の大実業家は特に地上の有毒な「大いなる人々」で、彼等自身のために巨大な富をため込むだけでなく、彼等の配下にある不幸な少年少女の「身体

といのち」を共に滅ぼします。バビロンは、精神的に肉体的に「売春婦の母」であり、あらゆる種類の姦通が、これら最後の時代にはびこります（黙示録9章21節）。しかし、このような忌むべき行為に対する創造主の裁きが、最後にそして徹底的に突然来るのです。

黙示録18章14節　また、あなたの心の望みである熟したくだものは、あなたから遠ざかってしまい、あらゆるはでな物、はなやかな物は消えうせて、もはや、決してそれらの物を見いだすことができません。

バビロンの葬送の歌は続きます。歴史を通して人々は、「**派手なもの、華やかなもの**」を渇望して、「**衣服があれば足れりとしなさい**」とパウロの熱心に勧告しているように、簡素な食べものと衣服では決して満足しません。イスラエル人がエリコを征服した時、アカンは「**美しいバビロン人の外套**」を欲しくなり、彼のいのちと家族皆のいのちを犠牲にしました（ヨシュア記7章21、25節）。

特に、地にすむ王たちや偉大な人々は、創造主を崇めるために彼等の財産を用いる代わりに、高価な食糧や葡萄酒に、贅沢な家や家具に、個人的装身具、高価な彫刻や絵画に、馬小屋または立派な馬車、自動車やヨットや飛行機に、そして数え切れないその他の富と贅沢品の臨時収入に財産を浪費しています。彼等自身で、また彼等の家族、または彼等の愛人が使うことの出来ないものを、彼等はさらに多くの富を得るためにまた投資します。バビロンの心は年から年へと総てのものを追い求め、そして決して満足しなかった。バビロンの心は、それで十分とは言いません。

しかし、今や、バビロンとバビロンの活力を失った総ての贅沢品は、永遠になくなってしまった。富と権

勢が一か所に集められた過去と未来を問わず世界で最も偉大な集積港である大いなる都市バビロンは、創造主の秤で量られ足りないことが分かった。そして、バビロンと共に、世界の商取引と偶像崇拝である人間中心主義からなる全バビロン的複合体は、またすぐに滅ぼされなくてはなりません。

大火事は、総てのものを焼失します。以前には、罹災して財力が失われる時、巨大な貿易商人たちや王たち、巨大な会社や複合企業は、常に、経済的損失を元に戻し財力を得る希望を持つことが出来ました。少なくとも、彼等の継承者や強奪者は彼等の富を引き継ぎ、基本的組織を永続させます。しかし、今回は、その損失は完璧で、損害を回復できません。実に総てのものが「**あなたから遠ざかってしまい**」バビロンは「**決してそれらのものを見出すことは出来ない**」のです。バビロンの姦淫の宗教体系や獣帝国の巨大な首都であり、世界の貿易と経済の大帝国であるばかりでなく、バビロンによって創造主と人を結びつけていた総ては過ぎ去り、時間の続く限り、決して再び見ることは出来ません。

さらに、バビロンの破滅は、人が立てた大計画に期待した結果を味わう前に突然にやって来ます。ブドウの実は、夏の終わりにもぎ取られる「実際に熟した果物」ですが、まだブドウの木についている果実に裁きがくるようです。「おいしいもの」は、文字通りに「ふっくらした力強いもの」であり、上等なものは、もっと明確に「豪華でぜいたくなもの」です。しかし、破滅が、バビロンの体制で成果を得ようと欲張っている魂だけに突如としてくるので、体制から来る実を実際に手に入れることはできないのです。

黙示録18章15節　これらの物を商って彼女から富を得ていた商人たちは、彼女の苦しみを恐れたために、遠く離れて立っていて、泣き悲しんで、

彼等の損失の甚だしさは、地上の商人たちの上に重くのしかかります。地の王たちは自分の立場に希望がなく、彼等が将来巻き込まれる険悪な状況を素早く察知します。彼等は彼女の苦しみを恐れたために、遠く離れて立っています(10)。今や商人たちも遠く離れて立っています。世界のいたるところでニュースが走り、諸国の混乱し、倒壊した総ての都市で、資産家は震え泣き叫んでいると伝えています。

主イエスはマタイ福音書16章26節で「人は、たとい全世界を手に入れても、まことのいのちを損じたら、何の得がありましょう」と言われました。利益と損失計算を扱うのに慣れている人々は、その計算によりおおくの注意を払って時を過すはずです。彼等は彼等が豊かにさせられているとの不注意にも実に誤った考えを付け加え、創造主と自分の魂にたいし余りにも過小評価しています。これらのものが永遠に失われているので、彼等の計算書の莫大な赤字が彼等に立ち向かい、彼等は永遠に破産し、決して立ち直れないことを知るのです。

この時点でもし存在しているとすれば、ウオール街はパニックに陥り、それゆえ、英国新聞界、ソルボンヌ大学、そしてチュリッヒの銀行業者たちもパニックに陥ります。ロックフェーラー財団やロスチャイルド金融資本家は彼等の眼前で彼等の超自然的大企業帝国が崩壊するのを見、彼等は嘆き泣き叫びます。

聞きなさい。金持ちたち。泣き叫びなさい。……あなたがたは、地上でぜいたくに暮らし、快楽にふけり、殺される日にあたって自分の心を太らせました。あなたがたは、正しい人を罪に定めて、殺しました。彼はあなたがたに抵抗しません。(ヤコブ5章1、5、6節　新改訳)

この使徒ヤコブの預言は終わりの日の文脈で始まり、たぶん、この出来事そのものを予見しています。信者に対する彼の勧告は、それとは著しく異なっていて、**「こういうわけですから、兄弟たち。主が来られる時まで耐え忍びなさい。見なさい。農夫は、大地の貴重な実りを、秋の雨や春の雨が降るまで、耐え忍んで待っています。あなたがたも耐え忍びなさい。心を強くしなさい。主の来られるのが近いからです。兄弟たち。互いにつぶやき合ってはいけません。さばかれないためです。見なさい。さばきの主が、戸口のところに立っておられます。」**(ヤコブ5章7～9節)。じっと我慢できないバビロン人たちは、果物が、もぎ取られる前に、滅びます。**「聖徒たちの忍耐」**(黙示録14章12節)を持って信者は、バビロンで失われた地の素晴らしい果実すべてをある日楽しみます。大いなる裁きが間もなく扉から入ってきます。

黙示録18章16節　言います。『わざわいが来た。わざわいが来た。麻布、紫布、緋布を着て、金、宝石、真珠を飾りにしていた大きな都よ。

王たちと同様に、商人たちも「わざわいが来た、わざわいが来た」と叫んでいますすでに、彼らがあれほど苦悩と嘆きを経験したにも拘らず、ただ一言の後悔も罪の悲しみの言葉もなく、また、バビロンの滅亡は聖なる裁きである事さえ認めないのです。彼等は富と権力に対するあくなき敬慕でひどい目に遭わせた多くの人々の身体にも心にも少しも遺憾に思っていないのです。

大いなる嘆きについて彼等が考えられる総ては、富を失い贅沢な暮らしを失ったことです。美しい服装と

宝石で飾られた装飾品、全体としてのバビロンと特に思い上がった居住者の両方が、突然、総てを失った、これが彼等の唯一の関心事です。罪の特質はこのようなもので、罪はそれ自体が裁きになります。

焼き金で焼かれた良心で（ーテモテ４章２節）、聖霊の有罪を宣告する使命を繰り返し拒絶する人々は、創造主が彼等と最早争わない日が来て（創世記６章３節）、彼等はもう正しいことをしたいとの願望も能力も持たなくなります。**「不正を行うものはますます不正を行いなさい」**は地獄に離れていく人々に対する創造主の恐ろしい宣言です（黙示録２２章１１節）。もし、ただ完全に利己主義によって、また、彼らは彼等自身の強い欲望を満足するために自分の財産をため込むことに支配されるなら、所持品がなくなる時完全に混乱し見捨てられます。

「愚かな者よ」と**主**は言われました、**「あなたの魂は今夜のうちにも取り去られるであろう。そしたら、あなたが用意した物は、だれのものになるのか」**（ルカ１２章２０節）。多くの金持ち、偉大な人々や権力者は、陰鬱な暗いかの日に天からこのような声を聞くでしょう。そして、彼らの叫び声は大きく苦々しくなります。彼らが大切にしていた金や宝石はみな、他の都市に行くでしょう。**「彼らの銀も、彼らの金も、主の激しい怒りの日に彼らを救い出せない。そのねたみの火で、全土は焼き払われる。主は実に、地に住むすべての者をたちまち滅ぼし尽くす。」**（ゼパニヤ１章１８節）

燃えている都の見事な衣服や宝石で飾られた装飾品は、またバビロンの年を経た大淫婦の装飾品でもありマした（黙示録１７章４節）。そして、これら同じ生活必需品の商売は地の商人たちをとませてきました（１２）。しかし、今やそれはすべて灰燼に帰しました。けれども、ある日大都市が設立されます。その都市には真珠の門があり、純金の大通りとあらゆる宝石からなる土台石があり、その都の住人達は白い麻布を着ていて、

決して過ぎ去らないのです。そして「災いだ、災いだ」の代わりに鳴り響く叫びは「ハレルヤ、アーメン」となるのです。

黙示録１８章１７節　あれほどの富が、一瞬のうちに荒れすたれてしまった。また、すべての船長、すべての船客、水夫、海で働く者たちも、遠く離れて立っていて、

わずか数年前に、人々は、偉大なバビロンが、瞬く間に再建された、いわば、千年の眠りからバビロンが復興したのを見て驚きました。そして、傲慢な支配者、獣が黄泉に下ったと断言し、その後に復活したと思わせる状況に匹敵しています。彼らの栄光の期間がいかに短いかを知る者はほとんどいませんでした。一時間の内に、バビロンは完全に火で焼かれ、すぐに、獣は、終わりなく燃え続ける火の池に移されます。これまで聞かれた悲しみの叫びは、主に地の王たちや大商人たちのものでした。彼らの政治的国際商業帝国はバビロンとともに突然崩壊してしまったのです。しかし後に、他の大衆も、自分たちが蒙った莫大な損失に気付き始めたので、この大いなる悲しみに加わります。

バビロンはすべての貿易の主要な発信源で地球全体の富の貯蔵庫だったので、最も目立って影響を受けたのは、海運業に関する産業に従事していた人々です。大型船の船長たちは嘆き、海運業者や商品を納入する商社の幹部は嘆き、ついで、すべての商売と港湾労働者の組合の幹部は嘆きはじめ、船舶で航行する人々すべてが嘆きます。おそらく、ここでの船泊には航空機も含まれます。なぜなら、多くの国際間の旅行と貿易は、今や巨大な世界的航空機業に集中しているからです。

まもなく、海運業者やその職員たちは、輸入業者や仲買業者たちと共に、―すべての国と国との貿易に由来して収益と報酬を得ているすべての人々は、―、地震で荒廃した都市の瓦礫のただ中で撮影されたテレビ画面の恐ろしい光景を見ながらむせび泣き、ついには大きな耐え難い嘆きの涙を流します。

黙示録18章18節　彼女が焼かれる煙を見て、叫んで言いました。「このすばらしい都のような所がほかにあろうか。」

王たちや偉大な人々の様に、これらの人々も、世界中いたるところから、燃え続けるバビロンの空高く成層圏にまで立ち上る恐ろしいキノコ雲を見つめるにつれて、驚きおそれ、恐怖に満たされた。2、3日前、全世界に起こった地震で、彼らの町が揺れ動き倒壊したが、彼らが誇りとしていた首都は生き残った。そして、それは、獣がやがて来る大規模な対決にも勝者になることを保証していたのです。

しかし、今やバビロンが荒れ果てているだけでなく、灰燼に帰し、あらゆる希望は潰え去った。バビロンが持ちこたえられないなら、どの都市も耐えられません。なぜなら、この素晴らしいバビロンのような都市は決してなかったからです。

創造主ははっきりと語っておられます。人々が巨大な都市に集まることは決して創造主ご自身の計画ではあり得ないと。彼らは広がり地を満たすはずでした（創世記1章28節）。土地を耕しながら、人の最もすばらしい善意と創造主の栄光のために創造主の大いなる創造の御業を楽しみ用いるはずでした。ノアの洪水の後、創造主はもう一度地を満たせと命じました（創9章7節）。

この二つの場合ともに、不従順な人々は、むしろ大きな都市に住むことを選び、「**主**の名を呼び求めることよりも、自分の名を挙げる」ことを選びました。カインは最初の町を建て（創4章17節）、ニムロデはバベルの塔を造り（創10章10節）、ノアの洪水の前と後で、それぞれの文明の偉大な中枢となる都市を建て、人々を創造主から離れさせました。最後に、すべての都市の中で最も偉大な都市バビロンは、諸国民の都市すべてと共に完全に倒壊してしまった。そして、少なくとも、世界は、「**堅い基礎の上に建てられた都**」（ヘブ11章10節）である他の都を受け入れる準備が整っているのです。

黙示録18章19節　それから、彼らは、頭にちりをかぶって、泣き悲しみ、叫んで言いました。「わざわいが来た。わざわいが来た。大きな都よ。海に舟を持つ者はみな、この都のおごりによって富を得ていたのに、それが一瞬のうちに荒れすたれるとは。」

彼らの極度の絶望状態は、手にいっぱいの土をかき集め頭に振りかけるという苦悶の表現で示されています。この行為は、哀歌2章10節やヨブ記2章12節にあるように古代に行われていましたが、今日では異様な行為です。それにもかかわらず、適切な表現です。そして、地は間もなく彼ら自身の死体で満たされ、彼らは塵（ちり）に帰るという彼らの恐怖を象徴的に示しています。

これは、聖書の決定的で独特な悲しみの表現（9～19節）の最後の節です。ここには、嘆き悲しむ彼らの恐ろしい運命に対する四つの言及（9、11、15、19節）と、「一瞬」の内に空前の崩壊が来ることに関する三つの言及（10、17、19節）があります。恐らく、この嘆きの哀歌は、失われ断罪されていることを知ってい

る魂の望みのない嘆きをありとあらゆるどの文献よりもよく表しており、悔い改めない不信の罪を認めたり、気にかけたりすることさえ出来なくしているのです。彼らの唯一の考えは、失った富と権力についての思いです。

彼らの大都市バビロンについての最後の悲しい批評は、なお、バビロンが世界貿易と金融を中央集権化したことで、このことが、物質中心主義の大衆の存在を可能にし、それによってもたらされたバビロンの裕福さと富を取り扱っていると批評しています。**「創造主をおのが避け所とせず、その富の豊かなるを頼み、その宝に寄り頼む人を見よ」**と（詩篇52篇7節）。

歴史を通して、人間中心主義の宗教と富と贅沢とすばらしい放縦さを約束したバビロンの偉大な体系は、遂に、突然、完全な荒廃をもたらしました。

天にある喜び

主イエス・キリストはずっと昔**「ひとりの罪人が悔い改めるなら、創造主の御使いたちに喜びがわき起こるのです。」**（ルカ15章10節）と言われた。失われた人々が方向転換し救い主を信じる時、罪人が地獄から救い出され、永遠に天の御国を受け継ぐので、天では実際におおきな喜びがあるのです。

代わりに、もし罪びとが変更不可能なほどに心を頑なにし不信の者となり、多くの他の人々を彼らと共に

地獄に導くなら、その場合、これらの人々が裁きの座に引き出される時、天においてほかの種類の喜びもあるのです。もちろん、どの聖徒も天にある天使たちの誰も、人々が地獄に引き渡されるのを喜ばないが、このような人々によって他の人々が創造主から引き離されることになるのを抑えられるならば、彼らは喜ぶに違いありません。**「主なる神（父なる創造主）は言われる、わたしは生きている。わたしは悪人の死を喜ばない。むしろ悪人が、その道を離れて生きるのを喜ぶ。」**（エゼキエル33章11節）。なお、聖書は**「正しい者が、しあわせになれば、その町は喜び、悪しき者が滅びると、喜びの声がおこる。」**（箴言11章10節）とも言う。

このように、この時点で論調が著しく変わります。バビロンの突然の消滅に対する地に住む人々の悲しみの挽歌から、バビロンの消滅のせいで、天における雰囲気は、瞬く間に、喜びと感謝に移ります。9節から19節までの哀歌とは著しく異なり、黙示録18章の最後の五つの節は、勝利と応えられた祈りへの讃歌となっているのです。

黙示録18章20節　おお、天よ、聖徒たちよ、使徒たちよ、預言者たちよ。この都のことで喜びなさい。神（創造主）は、あなたがたのために、この都にさばきを宣告されたからです。」

この励めの言葉は、恐らくヨハネが以前4節と8節で聞いた天からの声と同じです。そうでなければ、ありえるのは、その声は、大いなるバビロンの滅亡の興奮に巻き込まれたヨハネ自身から出た叫びだということです。

いずれにしても、その叫びは、天の御座に集まっている総ての聖徒たちに向けられた歓喜の叫びです。特

別な挨拶は一般的に用いられている天に対してで、天にいる天使たちと全歴史時代に生を受け復活した人々すべてに対してです。地上にいる人々はバビロンの崩壊を悲しむが、天にいる人々は喜びます。

天にいるすべての者が歓喜に包まれていますが、特別な喜びを経験している二組の人々、すなわち聖なる使徒たちと預言者たちがいます。彼らは、地上で創造主の特別な務めを帯びて、特に窮乏と迫害を経験した人々です。彼らの実に重い重荷は今や取り除かれ、バビロン滅亡に関する彼らの証言が正しいと立証されたのです。

聖（ギリシャ語のハギオス）という言葉は、「取り除けておかれた」または「捧げられた」存在であることを示す基本的意味を持つ聖徒と同じです。

多くの写本は、ここに余分な接続詞を入れ、そのため、この節はしばしば「汝ら聖徒たちと、汝ら使徒たちと、汝ら預言者たち」と訳されています。けれども、この接続詞は余分かもしれません。なぜなら、使徒たちと預言者たちも聖徒たちなのだからです。ローマカトリックの教会学は、通常のクリスチャンとは異なる特別な部類に［聖徒］を分類しているのかもしれません。しかし、聖書はこのような区別をしていません。聖書では、真の信者は総て［聖徒］です。また、すでに述べたように、「天」という言葉そのものに、確かに聖徒たちが組み込まれているのです。

こういうわけで、丁度、欽定訳が取っている「汝ら聖なる使徒たちと預言者たち」という、欽定訳の翻訳が最善のようです。実際に、教会時代にキリストの聖なる使徒たちと預言者たちに**主**が与えられた新しい啓示に関して、この同じ節「聖なる使徒たちと預言者たち」が、使徒パウロによってエペソ書3章5節で、実際に用いられています。その中で、彼らは、新約聖書の制度で、キリストの教会を建て上げるために創造主の新しい啓示を受け取る使命のために特別に「取り分けられて」いたのです。

使徒たちは大きな迫害を受け、ヨハネを除いてすべての使徒たちはすでに殉教の死を遂げていました。同じことが新約聖書の他の預言者たちにも当てはまる。（例えば、ステパノは、預言者であった。彼は、石打にあって殉教の死を遂げる前に創造主からの驚くべき啓示を受け、使徒の働き七章にある説教を、聖霊に導かれて語りました）。

彼らは、皆、バビロンに触れて忠実に力強く説教していた。彼らが地上にいた時、世界的組織であるヒューマニズム（人間中心主義）に立つ偶像崇拝と、物をむやみに欲しがる物質中心主義が、彼ら総てを殉教の死に追いやるかのように思われた。こうして彼らは、その時代に建て上げられた首都とその政治制度を整えたバビロンの最終的、徹底的かつ永久の破壊を、天の有利な観察点から今や観察できるので、その喜びは大きいものでした。旧約聖書にある大預言者たちも、彼らの勝利の歓喜を同じように享受しているに違いありません。**「復讐は私のすることである」**と**主**は言われました（ロマ12章19節）。彼らの歴史の初めに遡って創造主ご自身の民の中にさえ偽りの宗教家がいました。それに関して、**「復讐と報いとは、わたしのもの、それは、彼らの足がよろめくときのため。彼らのわざわいの日は近く、来るべきことが、すみやかに来るからだ。」**（申命記32章35節）と**主**が約束されたように。

黙示録18章21節　また、ひとりの強い御使いが、大きい、ひき臼のような石を取り上げ、海に投げ入れて言った。「大きな都バビロンは、このように激しく打ち倒されて、もはやなくなって消えうせてしまう。

今ここで他の天使が舞台に登場し、バビロンに関するもう一つの証言をします。黙示録14章に登場する

６人の天使の第２の天使が、バビロンの差し迫った倒壊に関して地に預言的な警告を伝えており（黙示録１４章８節）、したがって、この天使はおそらく同じ天使でしょう。

ここに記された出来事は、明らかにバビロンの焼失後のいつか、または、数週間後でさえあり得るのです。黙示録１８章２節だけでなくイザヤ書１３章２０～２２節、エレミヤ書５０章３９節の預言に書かれているように、野の獣や悪霊の住処になるまでバビロン滅亡後十分な時が経過しています。しかし、その時、まさに、バビロンの思い出さえ断ち切られ、したがって、バビロンの廃墟さえ見出されないのです。海に投げ込まれた重い石が海底に沈み再び見出されないように、バビロンもまた永久に忘れ去られてしまいます。このことは天使が巨大な石を海に投げ込む描写で、恐らく、ユーフラテス河畔に立つバビロン帝国はペルシャ湾に消え去るでしょう。

特に、ヨハネは外観はひき臼の特徴を表しているような石の様であったと記しています。ひき臼を海に投げ込むことは、ヨハネがそれを用いた特別な理由を示唆するにはとても相応いとは言い得ない比喩です。ことによると、ヨハネは何年も前に**主**イエスが集まってきた弟子たちを教えて同じような比喩を用いられた時のことを思いしたのかもしれません。**「しかし、わたしを信じるこの小さい者たちのひとりにでもつまずきを与えるような者は、大きい石臼を首にかけられて、湖の深みでおぼれ死んだほうがましです。」**（マタイ１８章６節）。

躓（つまず）きを与える最も偉大なもの・バビロンは緋の衣をまとい、金で飾ったけれども、今や、彼女の着物は、彼女の首にぶら下がっていて、真っ逆さまに深い海の底に彼女を引きずり込んでいく大きなひき臼以外に何もないのです。

同じような運命がバビロンに関するエレミヤの預言の終わりに記されています。**「この書物を読み終わったなら、それに石を結びつけて、ユーフラテス川の中に投げ入れ、『このように、バビロンは沈み、浮かび上がれない。わたしがもたらすわざわいのためだ。彼らは疲れ果てる』と言いなさい。」ここまでが、エレミヤのことばである。**」（エレミヤ５１章６３、６４節）

おそらく、これはちょうど数日前、ことによると数週間前に起こった地球全体に及ぶ地震の後に来た精神的ショックによるストレスでもたらされます。突然、メソポタミヤの平地すべてが、あたかも深い地殻に巨大な裂け目が開いているかのように落ち込むのです。ペルシャ湾の水が大口を開けた穴に轟音をあげて流れ込むように全ユーフラテス流域が水浸しになるでしょう。

このように、バビロンはユーフラテス川と浸食する海に沈み、バビロンの誇り高い建造物総ては、世界が続く限り水面下に横たわり見えなくなります。**「ああ、バビロンは国々の間で恐怖となった。海がバビロンの上にのしかかり、その波のざわめきにそれはおおわれた」**（エレミヤ５１章４１、４２節）。暗黒と悪霊、火と洪水、それから永遠の死。バビロンが海で虐殺されただけでなく、すぐに**「海にいる竜も殺される。」**（イザヤ２７章１節）。

黙示録１８章２２節　立て琴をひく者、歌を歌う者、笛を吹く者、ラッパを鳴らす者の声は、もうおまえのうちに聞かれなくなる。あらゆる技術を持った職人たちも、もうおまえのうちに見られなくなる。碾き臼の音も、もうおまえのうちに聞かれなくなる。

その天使からの裁きのメッセ～ジは続きます。１２節、１３節でバビロンでの以前の国家間の貿易に関し

て素晴らしい洞察がなされたように、22節、23節はバビロンにおける以前の日々の生活が描写されています。そこには、近来非常に影響力のある種類の、おそらく大音響の官能的な音楽を奏でる多くの楽屋がありました。挙げられた特別な部類（竪琴をひく者、歌を歌う者、笛を吹く者）は、確かに、徹底的なものというより代表的なものを意味しているのです。竪琴は弦楽器の代表であり、それには多くの種類があります。「フルート奏者」とおそらく同意語の笛を吹く者とラッパを鳴らす者は、もっと多くの吹奏楽器を表しています。「歌を歌う者」は、恐らく特別に歌手に対する言及です。

バビロンは、「技巧」と［熟練工］の用語が示しているようにまた技術を持った職人たちの都市でもありました。このことは、バビロン住人が贅沢な生き方を要求していたことを反映しています。ひき臼に対する言及は、おそらく「麦粉」（13節）**や**、他のより高価な産物の製法を示唆しています。

この独特で頂点をなす出来事に言及していると思われる驚くべき記事がイザヤ書にあります。「新しいぶどう酒は嘆き悲しみ、ぶどうの木はしおれ、心楽しむ者はみな、ため息をつく。陽気なタンバリンの音は終わり、はしゃぐ者の騒ぎもやみ、陽気な立琴の音も終わる。歌いながらぶどう酒を飲むこともなく、強い酒を飲んでも、それは苦い。都はこわされて荒地のようになり、すべての家は閉ざされて、入れない。」（イザヤ24章7～10節：実際には24章全体を見て下さい）

この章ではバビロンの名で述べられてはいませんが、全体の文脈は完全に一致しており、「混乱せる町」への言及は、それが正しいことを立証しているように思われます。また、お祭り騒ぎと音楽に対しても同じような言及があります。黙示録の18章に記されている弦楽器、吹奏楽器に加えて、ここイザヤ書では打楽器（小太鼓）も述べられています。ぶどう酒と酔っ払いの豊富なことも強調されています。

しかし、それが利益のある貿易または贅沢な生活、騒々しい娯楽であっても、バビロンの活動のすべては、停止し、静かになります。もはや何も永遠に聞かれず、見られなくなるのです。

黙示録23章　ともしびの光は、もうおまえのうちに輝かなくなる。花婿、花嫁の声も、もうおまえのうちに聞かれなくなる。なぜなら、おまえの商人たちは地上の力ある者どもで、すべての国々の民がおまえの魔術にだまされていたからだ。

最後の折り返しの句「もう……なくなる」が続きます。もう適切な価格での商品の売り買いはない（11節）。もうあらゆる派手なもの、華やかなものはない（14節）。もうバビロンはない（21節）。もう音楽、あらゆる技術をもつ職人や工業の音は聞かれない（22節）そして今（23節）もう光もお祭り騒ぎのような社会行事もない。「もう……ない」または、それに等しい言葉が、この鳴り響く文章に8回も出てきます。

この最後の裁きの前のしばらくの間バビロンは闇となりました。怒りの第5の鉢のサバの下（黙示録16章10節）、獣の王座と国は単調な闇に陥っていました。バビロンは確かに超近代的照明設備を持つように細部にわたって設計されていたでしょうが、都に電力を供給する変電所は災害の衝撃で機能不全に陥るでしょう。ユーフラテス河が完全にひあがってしまうので、どの水力発電所も水の供給が途絶えるので使用不能となるでしょう。太陽光発電は永続する暗闇の都では役に立ちません。原子力発電や石油発電所はおびただしい冷却水の供給が出来なくて運転することが出来なくなるでしょう。他の地域からの送電は第4の災害のものすごい熱で送電不可能になっていて、それから後の全世界的地震による振動で完全に駄目になるでしょう。こ

うして、バビロン市は、少なくともある期間、照明のために最終的にローソクか燈油に頼らなければならないでしょう。その最後の日々はみじめな絶望的なときになるでしょう。

しかし、今、バビロンにはローソクの光さえないのです。バビロンとそこに住むべく運命づけられた住人のためには「まっくらなやみが永遠に用意されている。」（ユダ13節）のです。

バビロンが最初にはなやかな栄光を取り戻した時、それは世界諸国民の誇りと成っていました。瞬く間に、バビロンの一般市民（官公吏や兵隊と区別した市民の総称）は、くまなく諸国の民の名士で、富と知性と権勢を持つ人々であることを誇るようになりました。世界の有名な家族同士を結び付ける結婚が通常のこととなり、バビロンは自然に諸国民の真のるつぼになるのです。

幅広い文化や宗教の多様性を持つ結婚の習慣は、世界の人間中心主義の宗教体系（バビロンの奥義）の保護の下に自由に集められます。そして、奥義なるバビロンは、今や獣と偽りの預言者たちの偉大なる首都にその本部を持つに至ったのです。

最後に、世界が真の「国際連合」と真のヒューマニズム（人間中心の）文化を達成します。完全に合わせられたすべての国々、部族、民族と完全に統合された信条をもち、バビロンそのものは、最も豊かな人類が達成する展示場の原型です。恐らく、バビロン市民の結婚式は、富とばか騒ぎの酒宴の派手な見せびらかしの機会を提供するはずです。性的放縦はどこででもありふれていましたが（黙示録9章21節、14章8節）、結婚は政治的、経済的、文化的条件として大きな意味を持つはずなので、結婚の誓約は貞節の見地から見てほとんど意味がありません。

しかし、今やすべての結婚式と社会的文化的行事はバビロンで永遠に終わってしまったのです。「素晴らしい人々」は死に、有力な家柄は破壊され、宮殿のような住居は燃え、都バビロンそのものは、どっと押し寄せる海の下に消えさります。バビロンの市民は地上の選り抜きの人々・エリートで、創造主を敬わない文化が産み出した最も偉大な貿易商人、金融業者、知識階級と支配者たちでしたが、今や彼らの偉大さは過去のものです。

ずっと昔創造主は、バビロンの王であるネブカデネザルを「わたしの僕」（エレミヤ25章9節）として呼び出だし、他の神々を求めていたご自分の民に同じような裁きを実行するためにバビロンを用いていわれます**「わたしは彼らの楽しみの声と喜びの声、花婿の声と花嫁の声、ひき臼の音と、ともしびの光を消し去る。」**（エレミヤ25章10節）と。

しかしながら、ご自身の民に徹底的裁きをなされた後、最後には創造主はバビロンとすべての民にも同じ激しい怒りの杯を与えられ（エレミヤ25章15節）、**「万軍の 主 はこう仰せられる。見よ。わざわいが国から国へと移り行き、大暴風が地の果てから起こる。その日、主 に殺される者が地の果てから地の果てまでに及び、彼らはいたみ悲しまれることなく、集められることなく、葬られることもなく、地面の肥やしとなる。」**（エレミヤ25章32、33節）

最後に、バビロンに下された恐ろしい裁きの二重の理由が繰り返し述べられています。第一の理由は諸国の民がだまされたバビロンの魔術によってでした。悪魔的進化論に立つヒューマニズムの偽りの宗教を広めたバビロンの大淫婦が、ニムロデ以降世界史で文字通りすべての国民を堕落させたのです。サタンが全世界を惑わしたのはバビロンを通してでした（黙示録12章9節）。程度の違いはあれ、すべての地の住民は彼女の

腐敗したぶどう酒に酔わされた（黙示録17章2節）のです。

さらに、黙示録9章21節にあるように「魔術」、実際には宗教的幻想を生じさせ、麻薬を用いて意識改造状態にするのです。魔術と翻訳されているギリシャ語は、ファルマケイア（pharmakeia）で、「麻薬」または「飲み物（薬毒などの）」または「薬物治療」を意味します。こうして、この節は、すべての国々はバビロンによって毒薬を飲まされ、偽りを信じるように騙されていた事実を述べています。神秘的超ヒューマニズムの近代の復興で実際に用いられている幻覚を引き起こす薬物か、または、進化論に立つ人間中心の科学主義による知性の催眠によってか、バビロンの大淫婦はすべての国々を創造主以外の神を礼拝するように騙してきたのです。

黙示録18章24節　また、預言者や聖徒たちの血、および地上で殺されたすべての人々の血が、この都の中に見いだされたからだ。

大淫婦の金の杯は外見上美しいが、中味は穢れた血と忌むべきものの混ざりもので、バビロン自身は血に酔っていた（黙示録17章4、6節）。これはバビロンの恐るべき倒壊の第二の理由です。彼女は淫婦の母であり、創造主からの人類の背信の歴史で、すべての偽りの宗教と哲学を生み出しただけでなく、彼女は迫害の母でもあった。彼女がだまして堕落させられなかった人々を彼女は追跡し殺したのです。

すべての世代の創造主を敬う人々は、創造主の敵に迫害されてきてきたのです。時には、迫害は、古代エジプト、アッシリヤ、ペルシャ、ローマ帝国のような異教徒の汎神論的多神教の名でなされてきました。近

代異教徒の国々（日本、中国、チベットや蒙古）でも同じようになされてきました。一神教まがいのイスラム諸国での迫害はもっと厳しいものでした。しばしばではないが異教的習慣と妥協してはめを外したキリスト教（中世期のローマカトリック教とイギリスの歴史でもっと後の英国国教会主義）は迫害の道具となりました。

すべてのなかで最も狂暴なのはヒューマニズムに立つ社会主義の名で扇動された大量迫害です。それは、ドイツのヒットラーのような全体主義ファシズム（独裁的国家社会主義）とか、革命的共産主義組織の名でなされました。マルクス以来共産主義者の粛清で迫害を受けた人の数は一億人以上と見積もられています。この進化論に立つ無神論の苦い根から出た途方もない実は、まったくキリスト者でない多くの人々を殺しましたが、特に憎まれ迫害の矛を向けられたのは創造主の真の証人です。

これらの組織とその他多くの組織総ての根はバビロンにあります。厳しい起訴状が書かれています。地球歴史での長い悲しい武勇談（英雄物語）での人殺し、戦争その他すべて虐殺の根源、そして特に、創造主に従う聖徒や預言者たちの殺害者はバビロンです。バビロンの組織そして今やその力ある首都は裁かれ罪に定められ永遠の崩壊と忘却の彼方に引き渡されました。

これらの報いはみな、この時代の上に来ます。（マタイ23章36節）